

## 第3章 事業成果

本事業は、大学院生が国際的な共同研究プロジェクトを自ら企画、遂行する力を培うことを目的として、インターンシップ的訓練を提供するものであった。その結果として、本学学生と協定校若手研究者との間に共同研究プロジェクトが発足し、国際的なネットワークと恒常的な協力体制が出来上がった。このことは、国際的にも高い評価を受け、また、大学院生による多くの研究成果を生み出すこととなった。本章では、対外的評価に繋がる本事業活動の公開と大学院生による研究成果について、報告する。

### 3.1. 事業活動の公開

本事業の活動は、Web ページにおいてその詳細を公開し、ワークショップ、シンポジウム等の催しについては、さらに国内教育研究機関・研究者へのポスター送付、Eメール配信も行った。(本学言語学研究センターが共催したイベントについては、同センターも独自に広報を行っている。本学のポスターの多くは、言語学研究センターが作成したものである。)また、協定校も、ワークショップ開催にあたって、プレスリリースを行い、本事業を紹介する Web ページを設ける等、本事業を国際的に知らしめるために貢献した。特に海外からの反響が大きく、例えば言語学領域では南米や中国、日本語教育領域では北米の著名な大学からコンソーシアム参加の打診があった。以下に、本事業 Web ページと協定校の広報活動の概略を示す。

#### 3.1.1. 本事業の Web ページ

まず、本事業 Web ページがどのように活用されたかについて簡単に述べる。Web ページは、トップページ、メンバー、コンソーシアム科目、ワークショップ、論文公開、事業概要、関連リンクのセクションからなる。コンソーシアム科目、ワークショップ、協定校訪問など活動時期が近づくと、ニュース&トピックスとしてその活動がトップページに表示され、学外からも、どのような活動がいつなされているか分かるように配慮した。右は、日本語版のトップページである。

本事業の中心となるコンソーシアム科目、ワークショップに関しては、上述したように、それぞれ独自のページ



トップページ (日本語版)

<http://www.nanzan-u.ac.jp/GENGOKAGAKU/gp/i-aegs/index>

を設け、定期的に更新を行った。ワークショップのプログラムや開催時の様子も閲覧可能にし、コンソーシアム事業がどのように行われているかを詳細に知ることができる構成になっている。本学言語学研究センターが共催する活動については、研究センターWeb ページにリンクを張り、相互のページを行き来できるようにした。協定校が主催した共同事業に関しても、プログラムなどを掲載し、海外での事業活動として内容の閲覧を可能にした。

コンソーシアム			
●言語学領域			
日時	テーマ	協定校	担当教員
2006年1月31日 ～2月2日	動詞句の構造と機能範疇(予定)	シエナ大学	阿部 泰明, Adriana Belletti
2007年9月 17日～19日	項構造と機能範疇	ケンブリッジ大学 ハイデラバード 国立言語研究所	青柳 宏, K.A. Jayaseelan, Ian Roberts
2007年8月 22日～26日	極小理論の諸問題	コネチカット 大学	有元 将剛, Zeljko Bošković, 斎藤 隆, Susanne Wurmbrand
2007年2月 16日～20日	言語習得研究と普遍文法	コネチカット 大学 シエナ大学	Diane Lillo-Martin 村杉 恵子, Luigi Rizzi
2006年9月 11日～14日	演算子の移動と解釈	国立清華大学	斎藤 隆, 鈴木 達也 W.-T. Dylan Tsai
●日本語教育領域			
日時	テーマ	協定校	担当教員
2006年1月31日 ～2月2日	学習者の自律を育てる日本語教育	ニューサウスウェールズ大学	鎌田 修, トムソン 木下千尋
2007年8月 2日～4日	認知・言語・文化・コミュニケーション の日本語教育	同徳女子大学校	坂本 正 李 徳孝
2007年2月 1日～3日	接触場面研究	ベルリン自由大学	山田・ボヒネック 親子 鎌田 修

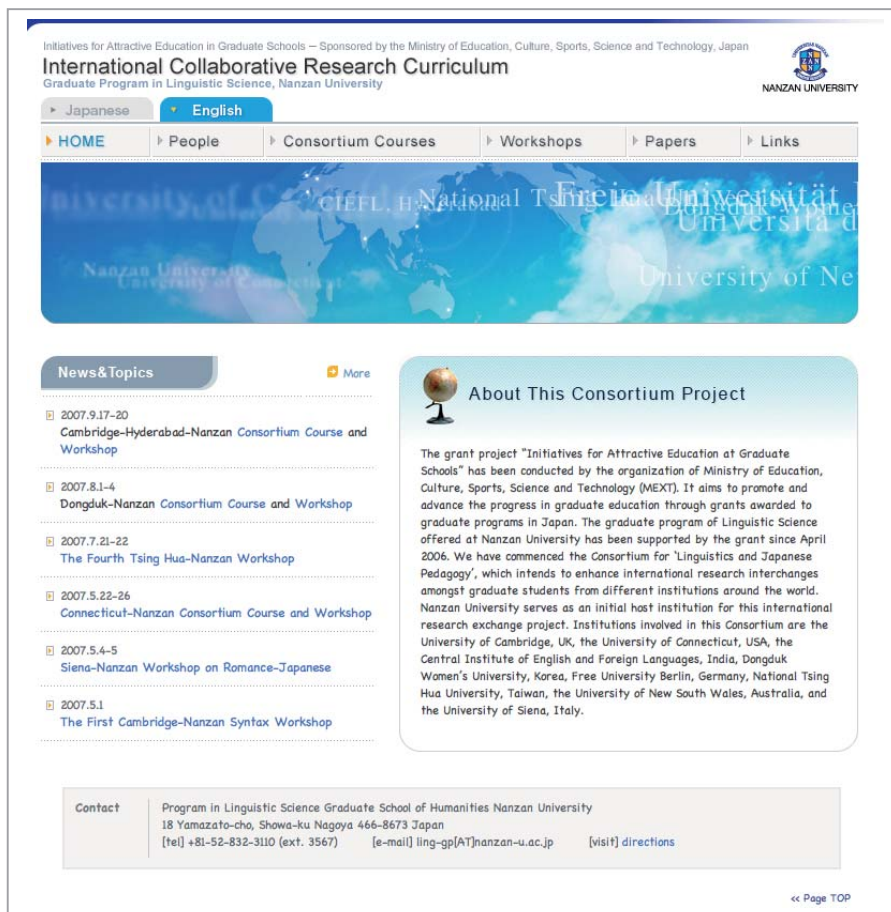
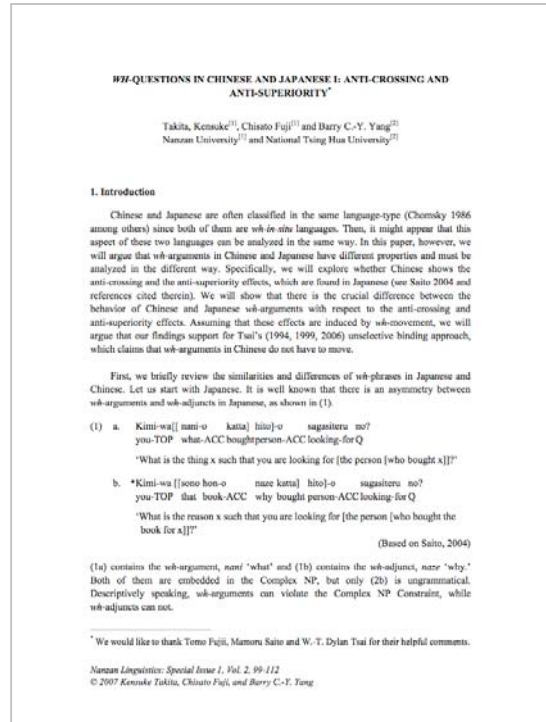
コンソーシアム・ページ

ワークショップ					
●言語学領域					
日時	ワークショップ名	開催場所	プログラム	紹介ムビー	
2006年2月2～3 日	シエナ-南山-清華共同ワークショップ	南山大学			
2006年1月25～ 27日	南山-ケンブリッジ-EFL 合同セミナー	ハイデラバード 国立 言語研究所			
2007年12月 15～17日	コンソーシアム国際シンポジウム	国立清華大学			
2007年 9月19～ 20日	ケンブリッジ-ハイデラバード-南山共同ワーク ショップ	南山大学			
2007年 7月21～ 22日	第4回清華-南山共同ワークショップ	南山大学			-
2007年 6月24～ 26日	コネチカット-南山共同ワークショップ	南山大学			-
2007年 5月4～5 日	シエナ-南山 ロマンズ語日本語ワークショップ ・比較統語論と言語獲得	シエナ大学			-
2007年 5月1日	第1回ケンブリッジ-南山統語論ワークショップ	ケンブリッジ大学			-
2007年 3月10～ 11日	清華-南山統語論ワークショップ	国立清華大学			-
2007年 2月 21 日	コンソーシアム協定 記念シンポジウム	南山大学			-
2007年 2月20～ 21日	コネチカット-シエナ-南山 共同ワークショップ	南山大学			-
2006年 12月1～2日	ケンブリッジ-清華-南山 共同ワークショップ	南山大学			-
2006年 10月21～22日	ハイデラバード-南山 共同ワークショップ	南山大学			-
2006年 9月14- 15日	清華-南山 共同ワークショップ	南山大学			-
●日本語教育領域					
日時	ワークショップ名	開催場所	プログラム	紹介ムビー	
2006年2月3日	ベルリン自由-同徳女子-ニューサウスウェールズ-南山 共同ワークショップ	南山大学			
2007年 8月1日	同徳女子-南山 共同ワークショップ	南山大学			
2007年 2月 4日	コンソーシアム協定記念シンポジウム	南山大学			-
2007年1月 30～31日	ベルリン自由-南山 共同ワークショップ	南山大学			-
2006年 10月14～15日	同徳女子-ニューサウスウェールズ-南山 共同 ワークショップ	南山大学			-

ワークショップ・ページ

また、論文公開のページでは、講義資料、大学院生の論文、共同研究の成果を pdf ファイルとして公開し、研究内容が明らかになるようにした。本事業終了後も、コンソーシアムの活動は継続するので、特にこのページの内容はさらに充実したものとしよう。

本事業 Web ページの一つの特徴は、国内のみならず国外にも本事業の情報が行き渡るよう配慮し、ほぼ全ての情報が日本語版と英語版の両方で閲覧できるようになっていることである。以下が、英語版のトップページである。本事業 Web ページを日英二カ国語で閲覧可能にしたことで、活動内容の公開性が大きく高まり、さらには、協定校参加者との連携強化に大きく寄与した。

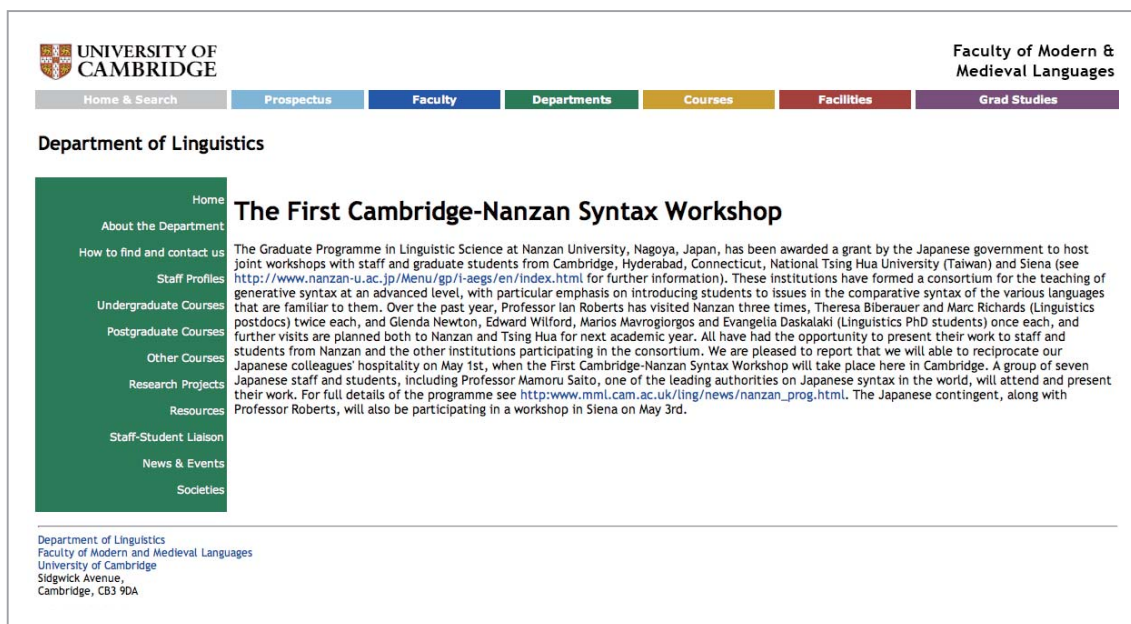


トップページ (英語版)

### 3.1.2. 協定校による広報活動

本節では、協定校が独自に行った事業内容の公表について素描したい。まず、協定校がワークショップやシンポジウムを主催する際には、それぞれが Web ページを設けて内容を公開している。上述したように本事業 Web ページに英語版を用意したことは、協定校サイドで本事業に関わる催しの広報が行われる時に、当該協定校の Web ページから本事業英語版 Web ページに言及することを可能にするという効果を生んだ。

さらに、協定校イベントの Web ページでは、本事業の概要も紹介され、コンソーシアム活動全般の目的と内容も示されている場合が多い。以下は、ケンブリッジ大学が主催した 2007 年 5 月のワークショップの開催を伝える同大言語学科のページである。(http://131.111.162.162/ling/news/nanzan\_collab.html)



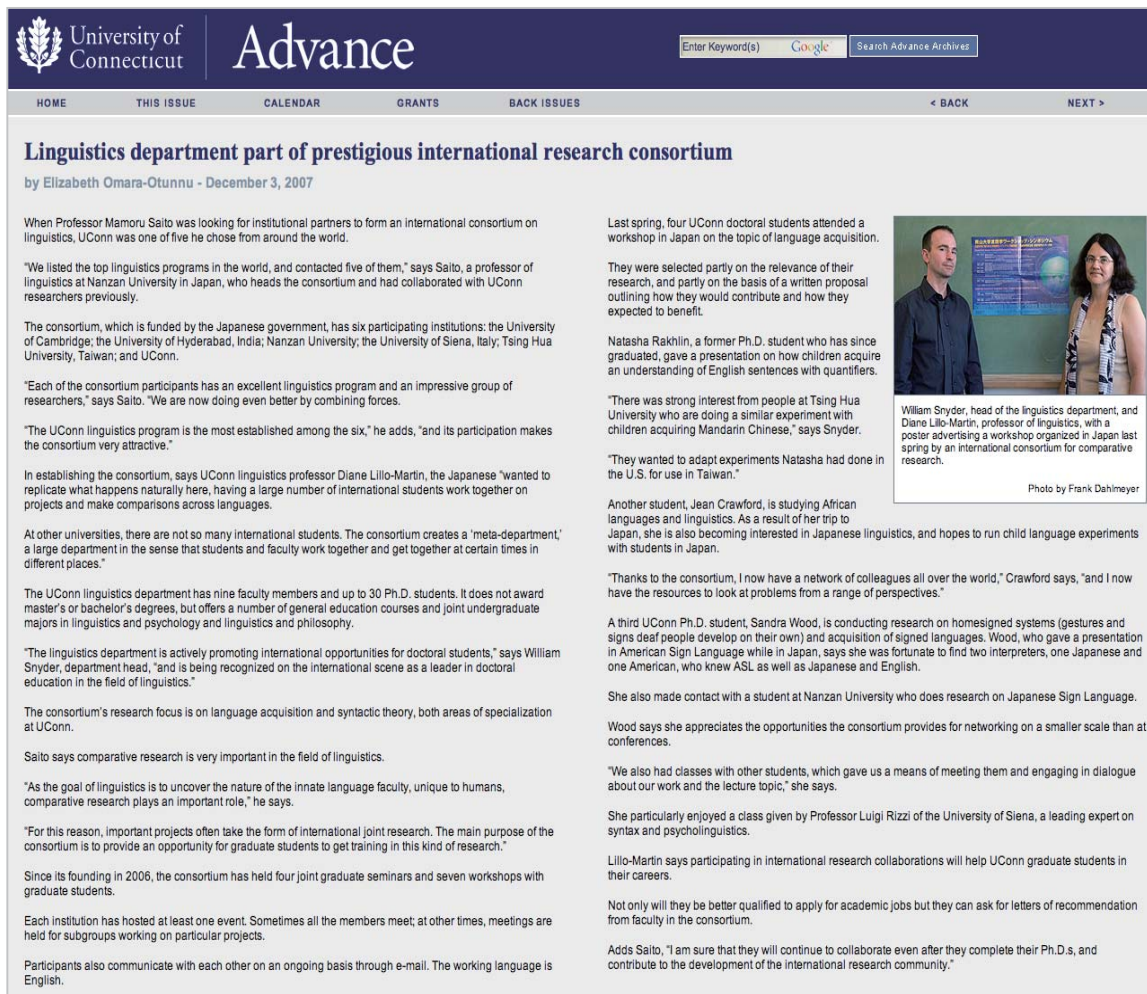
ケンブリッジ大学言語学科の Web ページから

このケンブリッジ大のページでは本学言語科学専攻が日本政府から補助を得て、高いレベルの大学院教育を行うためのコンソーシアム活動が可能になったこと、同大言語学科の教員・大学院生の本事業との関わり、そして、本学の活動に応じて、ケンブリッジ大学が第一回ケンブリッジ-南山統語論ワークショップを主催することが紹介されている。国立清華大学も、台湾政府からの補助を得てコンソーシアム・シンポジウムを主催した際に、本事業を紹介するページを、中国語、英語の両方で公開している（中国語版は次ページ参照）。(http://www.ling.nthu.edu.tw/ Consortium\_website/index.html)



国立清華大学言語学科の Web ページから

さらに、本事業の活動は、協定校を通して、海外の新聞でも取り上げられた。以下は、コネチカット大学のキャンパス紙 *UConn Advance* の一面に掲載された記事である。



コネチカット大学 *UConn Advance* 紙での本事業紹介記事

記事は、コネチカット大学が世界屈指の言語学プログラムによって構成されるコンソーシアムの一員であることを紹介し、本学齋藤衛教授、コネチカット大 Diane Lillo-Martin 教授、William Snyder 教授、そして2007年2月のコンソーシアム科目・ワークショップ・シンポジウムの際に本学を訪れたコネチカット大学院生のコメントを中心にその意義を述べている。本事業の取り組みが、本学大学院生だけでなく、協定校の大学院生にも良質の研究の機会を与えていることは、Jean Crawford 氏の「コンソーシアムのお陰で、今や世界中の研究者たちとつながりがあります」という発言などに見て取れる。また、アメリカ手話研究に従事し、本学でのワークショップ発表をアメリカ手話で行った Sandra Wood 氏は、「日本語、英語そしてアメリカ手話を解する、日本人手話通訳者、アメリカ人手話通訳者二名がいたことは幸運」であり、「他大学の学生とともに講義を受けることで、彼らと出会い、そしてお互いの研究、研究テーマについて話し合う機会を得ることができました」と語っている。記事を締めくくる齋藤教授のコメントにあるよう

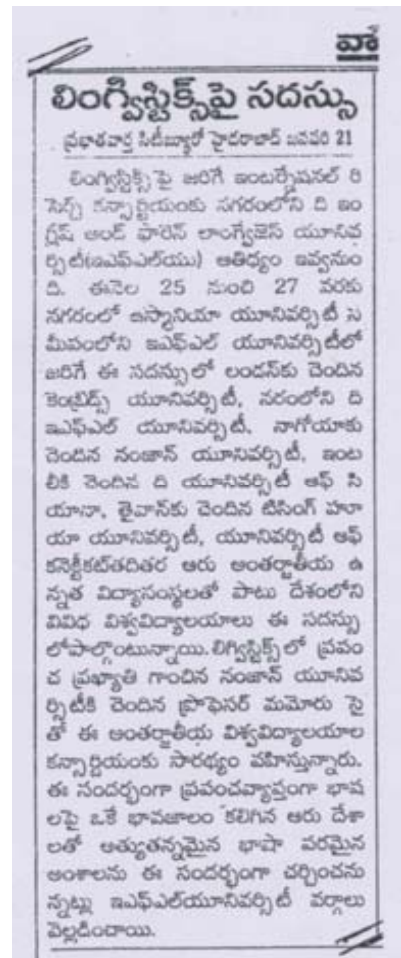


に、本事業の活動を通し、学生たちが「博士号を取得したあとも共同で研究を続け、国際的な研究コミュニティの発展に貢献していく」道筋が開かれたと言ってよいだろう。

ハイデラバード国立言語研究所 (EFL 大学) 主催でコンソーシアム合同セミナーが行われた際 (2008 年 1 月 25 日~27 日) には、同研究所がプレスリリースを行い、セミナー開催とともに本事業の取り組みが全国英語紙 *The Times of India*、*The Hindu*、*The Indian Express*、そして地元テルグ語紙 *Vaartha* で紹介されるに至った。



Hindu (2008 年 1 月 22 日付)



Vaartha (2008 年 1 月 22 日付)



*The Times of India* (2008年1月23日付)

例えば、*The Times of India* 紙は、「English and Foreign Languages University (EFL 大学) は、言語学（統語論と言語獲得）における国際研究コンソーシアムの会議を開催する。コンソーシアムには六つの研究機関—ケンブリッジ大学、名古屋・南山大学、イタリア・シエナ大学、台湾・国立清華大学、コネチカット大学—が参加する。また、コンソーシアムはインド国内の他の大学からの研究者が参加する国内ワークショップの機会でもある」との記事を掲載した。

このような広報活動を通じて、国際的にも本事業に対する反響があり、上述したように、北米、南米、中国の大学からコンソーシアム参加の打診がある。今後は、大学院生の共同研究が最も円滑に進むように配慮しつつ、コンソーシアムを発展させていくことになる。

### 3.2. 研究成果の公表

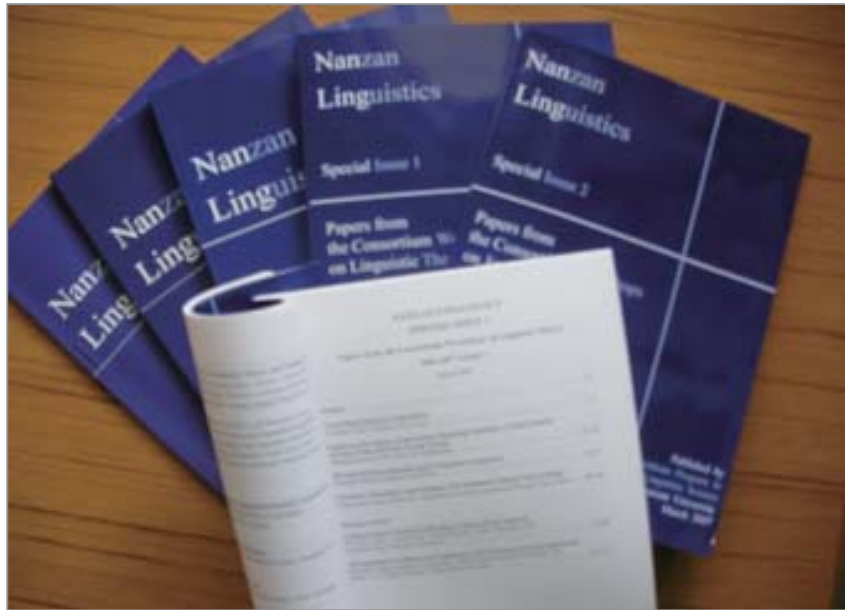
本学の大学院生は世界的に著名な研究者によるコンソーシアム講義を受講するだけでなく、自ら進んで研究活動を行い、共同研究を立案・遂行することが求められた。本事業ではその指導を本学と協定校の教員が共同で行ったが、その成果は、多くの論文として結実しつつある。過去2年間に発表された本学大学院生の単著論文、学位論文を見ても、協定校若手研究者との意見交換に基づいて、言語比較の視点から執筆されているものが極めて多い。また、共同研究についても、2006年9月の本事業開始とともに始められた清華大学との研究は、すでに数編の共著論文として発表されている。シエナ大学、EFL 大学、コネチカット大学等、他の協定校との共同研究も継続して遂行されており、共著論文の準備が進められている。

以下に、本学が発行する *Nanzan Linguistics* に掲載された論文と国際学会で発表された論文を紹介する。双方とも、大学院生、若手研究者が、ワークショップで発表し、参加者からのコメントやコンソーシアム教員の指導を得て執筆したもの、本学と協定校の大学院生が、コンソーシアム活動を通じて共同で執筆したものを含む。国際舞台での論文の公刊については、本事業が2年間という短期であったことにより、すでに公刊されている論文はまだ成果の一部であることを付記したい。国際学会ですでに発表を終え、論文集に掲載する論文を準備中であるケース、国際的専門誌に論文を投稿中、投稿準備中のケースが多々あり、公刊論文数は1年以内に大きく増加することになる。

### 3.2.1. Nanzan Linguistics, Special Issues (研究報告書)

*Nanzan Linguistics* は2004年以來、南山大学言語学研究センターが毎年刊行してきた論文集である。本学研究者の論文のみならず、国内外の言語学研究センター非常勤研究者からの投稿もあり、近年その研究論文集としての重要性が認識され、国際的に知名度が高まっている。

本事業期間中は、本事業の研究活動報告書として「特別号」(Special Issue)



が2006年度に3冊、2007年度に3冊の計6冊刊行された。事業の一環として参加者からの投稿を奨励した結果、本学と協定校の若手研究者から多数の投稿があった。本学大学院生は、本学および協定校教員の指導、若手研究者との意見交換を基礎として、研究結果を論文にまとめて論文執筆者としての経験をすると同時に、内容や体裁の確認、校正、目次作り、製本等の編集作業も行い、編集者としても様々な経験を積んだ。出版された *Nanzan Linguistics* は約200の国内外の研究機関に送付され、言語研究に役立てられている。以下に本事業の一環として刊行された Special Issue 6冊の内容を紹介する。

#### Special Issue 1. Volume 1

本論文集は2007年3月に出版されている。2006年度の言語学領域の成果をまとめた2冊のうちの最初の1冊であり、208ページからなる。協定校とのワークショップ Cambridge-Hyderabad-Nanzan Workshop on Functional and Lexical Categories (2006年3月8日~10日)、Tsinghua-Nanzan Workshop on Movement and Interpretation (2006年9月14日~15日) で研究発表を行った大学院生が研究内容をそれぞれ論文にまとめ、本論文集に投稿した。

本学からは、青野ますみ氏が日本語「～ている」構文に関して派生理論を用いて統一的にとらえる研究を、富士千里氏が日本語と日本手話の使役文の統語構造と獲得の研究を、瀧田健介氏が疑問詞と強調要素の語順についての研究を論文としてまとめている。協定校の国立清華大学からは、Liching Livy Chiu氏が中国語の複数要素削除現象について、Barry C.-Y. Yang氏が多重疑問文に見られる特異な現象について、Xin-Xian Rex Yu氏が中国語疑問文における評価副詞について、それぞれ論文を執筆した。ケンブリッジ大学からは、Marc Richards氏がフェイズと機能範疇についての論文を投稿し、同じく協定校のハイデラバード国立言語研究所からは、Deepti Ramadoss氏がタマリ語の機能範疇の獲得に関して (R. Amritavalli 教



授と共著)、Madhavi Gayathri Raman 氏が屈折接辞の獲得に関して(同じく R. Amritavalli 教授と共著)、論文を寄せた。

NANZAN LINGUISTICS, SPECIAL ISSUE 1. Volume 1. 目次 Papers from the Consortium Workshops on Linguistic Theory	
Preface	vii
Masumi Aono (Nanzan University) Derivational Theta-marking and a Uniform Analysis of the Progressive/Perfective <i>-te iru</i>	1–21
Liching Livy Chiu (National Tsinghua University) A Focus Movement Account on Multiple Sluicing in Mandarin Chinese	23–31
Chisato Fuji (Nanzan University) Two Types of Causatives in Japanese and JSL	33–65
Deepti Ramadoss and R. Amritavalli (EFL, Hyderabad) The Acquisition of Functional Categories in Tamil with Special Reference to Negation	67–84
Madhavi Gayathri Raman and R. Amritavalli (EFL, Hyderabad) Inflection in Specific Language Impairment (SLI) and Second Language Acquisition	85–104
Marc Richards (University of Cambridge) On Phases, Phase Heads, and Functional Categories	105–127
Kensuke Takita (Nanzan University) Focus and <i>Wh</i> Features in Interrogative C	129–163
Barry C.-Y. Yang (National Tsinghua University) On <i>Wh</i> -nominal/adverb Interaction and Left Periphery	165–186
Xin-Xian Rex Yu (National Tsinghua University) Evaluative Adverbs in Mandarin <i>Wh</i> -questions	187–208

### Special Issue 1. Volume 2

本号は2007年3月にVolume 1の続編として出版されている。前号と同様、2006年度の言語学領域の研究成果をまとめたものであり、112ページからなる。協定校とのワークショップ Hyderabad-Nanzan Joint Workshop on the Syntax-Semantics Interface (2006年10月21日～22日)と Cambridge-Tsinghua-Nanzan Workshop on Word Order and Functional Categories (2006年12月1日～2日)で発表された論文を含む。また、本事業のワークショップやコンソーシアム科目を足がかりに始まった大学院生の共同研究の中間報告も本論文集の中で行われている。

本学からは、大学院生の瀧田健介氏が名詞句内の敬語表現と削除現象についての研究を、嘱託講師の藤井友比呂氏が日本語の経験者主語にまつわる研究を発表している。ケンブリッジ大学からは、大学院生の Glenda Newton 氏が古アイルランド語の動詞に関して統語的音韻的な研究を発表し、国立清華大学からは、同じく大学院生の Chuan-Hui Ally Weng 氏が中国語の動詞 *rang* の様々な特性に関する論文を投稿した。

また、2006年3月8日～10日に開講された国立清華大学 W.-T. Dylan Tsai 教授、本学斎藤衛教授に



よるコンソーシアム講義を基礎として、本学大学院生である瀧田健介氏、富士千里氏、加太良枝氏、渡邊恵理子氏、嘱託講師の藤井友比呂氏が共同で非選択的束縛について研究報告を行った。さらに、瀧田氏と富士氏、国立清華大学の Barry C.-Y. Yang 氏が共同で中国語と日本語の疑問文の比較研究を行い、その結果をまとめた報告論文も本号に掲載されている。前者は、Tsai 教授の理論が予測する名詞句 *wh* 句と非名詞句 *wh* 句の非対称性を、さまざまな意味を有する日本語の「なんで」等を用いて詳細に検証し、理論を支持する証拠を提示したものである。後者は、中国語の名詞句 *wh* 句が非選択的束縛によって認可されるのに対して、日本語の *wh* 句が非顕在的移動によって認可されるとの仮説によって、日中語の様々な相違が説明されることを示している。いずれも、1982 年の C.-T. James Huang 氏の博士論文以来追究されてきた日中語 *wh* 構文の比較研究において、新たな方向性を示唆するものとなっている。

<b>NANZAN LINGUISTICS, SPECIAL ISSUE 1. Volume 2. 目次</b> Papers from the Consortium Workshops on Linguistic Theory	
Preface	vii
Tomohiro Fujii (Nanzan University) Controlling Japanese Experiencer	1–17
Glenda Newton (University of Cambridge) Exploring the Nature of the Syntax-Phonology Interface: A Post-syntactic Account of the Old Irish Verbal System	19–44
Kensuke Takita (Nanzan University) NP-internal Honorification and N´-Deletion in Japanese	45–67
Chuan-Hui Weng (National Tsinghua University) Causative, Permissive, and Yielding: The Mandarin Chinese Verb <i>Rang</i>	69–90
Kensuke Takita, Chisato Fuji, Yoshie Kabuto, Eriko Watanabe, and Tomohiro Fujii (Nanzan University) Category-based Unselective Binding: Evidence from Japanese	91–98
Kensuke Takita (Nanzan University), Chisato Fuji (Nanzan University), and Barry C.-Y. Yang (National Tsinghua University) <i>Wh</i> -Questions in Chinese and Japanese I: Anti-Crossing and Anti-Superiority	99–112

### Special Issue 2

本論文集も 2007 年 3 月に出版された。2006 年度の日本語教育領域の成果をまとめたものであり、158 ページからなる。同徳女子・ニューサウスウェールズ・南山共同ワークショップ (2006 年 10 月 14 日～15 日) で発表した大学院生が研究内容をそれぞれ論文にまとめ、本号に投稿した。

本学からは、大学院生の徐毓瑩氏が日本語の視点表現の習得についての研究を、川崎直子氏が第二言語習得における否定的フィードバックに関わる考察を、齊藤一夫氏が談話標識「そうですね」のコミュニケーション機能についての分析結果を論文としてまとめている。協定校の同徳女子大学の張恵貞氏は日本語社会教育機関の教育内容について、張栄花氏は韓国日本語学習者の学習スタイルの分類について、また金秀映氏は韓国高校生用の日本語教科書における第 7 次教育課程の反映度について、それぞれ論文にまとめ投稿した。同じく協定校

であるニューサウスウェールズ大学からは、尾島ヴァンダメイ幸香氏が「ら抜き動詞」の教育現場での位置づけについて、武田春子氏が外国人留学生の講義理解について執筆した。

<b>NANZAN LINGUISTICS, SPECIAL ISSUE 2. 目次</b> Papers from the Consortium Workshops on Japanese Pedagogy	
序文	vii
徐 毓瑩 (南山大学) 日本語の視点表現の習得について	1-11
張 惠貞 (同徳女子大学校) 日本語社会教育機関の教育内容に関する研究	13-23
ジャン・ヨンファ (同徳女子大学校) 韓国日本語学習者の学習スタイルの分類	25-31
Toshihito Kato (University of New South Wales) Constraints of Language Transfer and Transfer in Multiple Dimensions: A Review	33-58
川崎 直子 (南山大学) 第二言語習得における否定的フィードバックに関わる一考察	59-79
金 秀映 (同徳女子大学校) 韓国高校生用の日本語教科書における第7次教育課程の反映度	81-86
Yukica Ojima van der Meij (University of New South Wales) 'Ra-nuki' Verbs in Language Change of Japanese	87-120
齊藤 一夫 (南山大学) 談話標識「そうですね」のコミュニケーション機能について	121-144
武田 春子 (ニューサウスウェールズ大学) 外国人留学生の講義理解に関する研究概観	145-158

### Special Issue 3. Volume 1

3.1号は2007年10月に出版され、主に2007年度前半の言語学領域の研究成果をまとめたものである。351ページからなり、本学と協定校の大学院生13名が論文を執筆している。この論文集は、Cambridge-Tsinghua-Nanzan Workshop on Word Order and Functional Categories (2006年12月1日～2日)とConnecticut-Siena-Nanzan Workshop on Linguistic Theory and Language Acquisition (2007年2月20日～21日)で口頭あるいはポスター発表されたものを発展させて論文に仕上げたものを掲載しており、専門性の高い研究論文が収録されている。

本学からは、大学院生の伊藤敦司氏が二重目的語構文の項構造について、加太良枝氏が非選択的束縛のメカニズムの獲得について、新村正人氏がコピュラ文の日中語比較統語論について、矢野敬子氏が日本語可能構文の統語構造と獲得について、また、瀧田健介氏が囑託講師の藤井友比呂氏と共著で移動しない疑問詞の解釈について、それぞれ研究論文を執筆した。これらの論文は、いずれも協定校の教員やワークショップの出席者からの助言を得て執筆されたものである。また、加太氏の研究は清華大学とのコンソーシアム科目を出発点としており、矢野氏の研究は *Nanzan Linguistics* 1 (2004) に発表された村杉恵子教授と研修生橋本知子氏による共著論文を端緒として、本学大学院生の富士氏の研究や協定校コネチカット大学の Jonathan Bobaljik 教授と Susanne Wurmbrand 教授の共著論文で提案された分析に触発されたものである。

協定校からも論文の投稿があり、コネチカット大学からは、大学院生の Jeffrey Bernath 氏が「貧弱な」インプットのもとでのアメリカ手話獲得の研究を、Natalia Rakhlin 氏が言語獲

得過程における数量詞分散現象の研究を、Sandra K. Wood 氏が手話獲得のデータをもとに行ったインプットの種類と獲得時期との関係の研究を、それぞれ本号に発表した。シエナ大学からは、Elisa Bennati 氏がイタリア語の接語の第二言語習得について、Giuliano Bocci 氏がイタリア語のデータをもとに普遍的に存在すると思われる機能範疇について、Christiano Chesi 氏が統語構造の構築モデルについて、また Irene Utzeri 氏がイタリア語の関係節の獲得と産出について、それぞれ執筆した。なお、本号は、本学大学院生の瀧田健介氏、富士千里氏が中心となって、編集されたものである。

<b>NANZAN LINGUISTICS, SPECIAL ISSUE 3. Volume 1. 目次</b> Papers from the Consortium Workshops on Linguistic Theory	
Preface	v
Elisa Bennati (University of Siena) Object Clitic Climbing in Adult L2 Italian: Some Experimental Evidence from L1 English and L1 Spanish Near-natives	1–21
Jeffrey L. Bernath (University of Connecticut) Examining Impoverished Input: Viewing the Critical Period as a Period of Formalization	23–33
Giuliano Bocci (University of Siena) Criterial Positions and Left Periphery in Italian: Evidence for the Syntactic Encoding of Contrastive Focus	35–70
Christiano Chesi (University of Siena) Five Reasons for Building Phrase Structures Top-down from Left to Right	71–105
Tomohiro Fujii and Kensuke Takita (Nanzan University) <i>Wh</i> -adverbials In-situ, their Island-(in)sensitivity and the Role of Demonstratives in <i>Wh</i> -in-situ Licensing	107–126
Atsushi Ito (Nanzan University) Argument Structure of Japanese Ditransitives	127–150
Yoshie Kabuto (Nanzan University) The Acquisition of the Mechanism of Unselective Binding, LF <i>Wh</i> -Movement and Constraints on Movement	151–163
Chao-Lin Li (National Tsinghua University) Adverbial Verbs and Argument Attraction in Puyuma	165–201
Masato Niimura (Nanzan University) A Syntactic Analysis of Copular Sentences	203–237
Natalia Rakhlin (University of Connecticut) A New Pragmatic Account of Quantifier-spreading	239–282
Irene Utzeri (University of Siena) The Production and the Acquisition of Subject and Object Relative Clauses in Italian: A Comparative Experimental Study	283–313
Sandra K. Wood (University of Connecticut) Degrees of Resiliency in Acquisition of Language	315–330
Keiko Yano (Nanzan University) The Structure of the Japanese Potential ( <i>r</i> ) <i>eru</i> Construction: A Study in Syntax, Learnability, and Acquisition	331–351

### Special Issue 3. Volume 2

本論文集は 2008 年 3 月に出版され、主に 2007 年度後半の言語学領域の研究成果をまとめたものである。Connecticut-Nanzan Joint Workshop on Minimalist Syntax (2007 年 6 月 24 日～26 日) と The Fourth Tsinghua-Nanzan Joint Workshop (2007 年 7 月 21 日～22 日)、Cambridge-

Hyderabad-Nanzan Joint Workshop on Interface Conditions (2007年9月19日) で口頭発表された研究の一部が、論文としてまとめられ、本号に投稿された。本学からは、大学院生・須川精致氏が削除現象に残る島の効果の原因に関する論文を、大学院生・上田平安氏と科目等履修生・原口智子氏が日中語の複数辞を比較検討した論文を投稿した。須川氏は、日本語の項削除現象において、島の効果の消失がみられないことを示し、この一見理論の予測とは異なる事実が、実は従来の削除現象分析を支持するものであることを明らかにしている。この論文は、本学大学院生・篠原道枝氏の修士論文での研究を発展させたものであるが、島の効果の消失現象について、日本語項削除現象を他言語のスルーシングと直接的に比較することを可能にしたものであり、削除現象に関する比較統語論において重要な意義をもつ。上田、原口両氏の研究は、2007年7月の清華大学 T.-H. Jonah Lin 教授と大学院生の本学訪問に端を発し、清華大学とコネチカット大学の大学院生の助言を得ながら遂行された。日本語「たち」と中国語 *-men* を詳細に比較しながら、日中語の名詞句構造を検討した力作である。上田氏と原口氏は、現在、清華大学院生の H.-C. Joyce Tsai 氏とともに、研究をさらに発展させつつある。

村井（中谷）友美氏の論文および渡邊恵理子氏の論文は、共に言語獲得に関するものである。村井氏の論文は乳児の発声行動に関するもので、2007年8月に香港中文大学で開催された Workshop on Early Child Phonology で村杉教授と共同で発表した研究をさらに深めている。日本語を母語とする幼児を対象として生後1ヶ月から生後10ヶ月までの音の表現について考察し、他言語で報告される順序や現象と平行した結果が得られた事を報告した。加えて一語文期以降に見られる「言語」期のイントネーションやジェスチャーの特徴が喃語期にも見られる事を示し、「言語獲得の連続性」を実証的に示す結果となった。渡邊氏の論文は、日本語の与格主語の格の獲得に関するデータを分析したものであり、デフォルト（無標）の格付与による誤用について理論的に考察している。富士千里氏は、村杉恵子教授、研修生・橋本知子氏と共に可能文の獲得に関する論文を執筆した。この研究は、協定校コネチカット大学の Wurmbrand 教授から得た有益なコメントをもとに、本学大学院生・矢野敬子氏の研究 (Special Issue 3, Volume 1 の項を参照) をさらに発展させたものである。Nanzan Linguistics 1 (2004) に発表された村杉教授と橋本氏の共著論文を端緒として、本学大学院生の富士氏、矢野氏、渡邊氏が加わって共同あるいは独自にデータの幅を広げ、協定校研究者との意見交換をふまえて、VP/vP 構造の獲得に関する総合的なデータベースと理論が形成されつつある。

協定校のコネチカット大学の大学院生からも数々の論文が投稿された。Duk-Ho An 氏はスラブ諸語の多重疑問文における移動現象を考察し、Ana C. P. Bastos 氏は多重主語構文について日本語とブラジル語を比較してその類似点と相違点の分析を提案している。Natalia Fitzgibbons 氏はロシア語の否定一致現象の環境の一般化を提示し、その分析に取り組んでいる。澤田剛氏は日本語の文尾に現れる要素を詳細に検討し、田口茂樹氏は日本語関係節の構造を議論している。田中拓郎氏は遊離数量詞が現れうる環境を明確にし、その制限の起源を分析している。

本号にはこれらの研究に加え、本学大学院生および若手研究者が協定校の大学院生と共同で行った研究も共著論文として1編発表されている。本学大学院生・須川精致氏は、協定校

清華大学院生 Liching Livy Chiu 氏、藤井友比呂本学嘱託講師と共に、スルーシング現象の日中語の比較を行い、英語とは異なる日中語スルーシングの特徴を明らかにした。この論文は、分析を進めて行く上で取り組むべき課題を明確に提示しており、今後の研究の基礎となりうるものである。

<b>NANZAN LINGUISTICS, SPECIAL ISSUE 3. Volume 2. 目次</b> Papers from the Consortium Workshops on Linguistic Theory	
Preface	ix
Duk-Ho An (University of Connecticut/University of Toronto) Lower Copy Pronunciation and Multiple <i>Wh</i> -Fronting in ATB Contexts	1-12
Ana C. P. Bastos (University of Connecticut) The Brazilian Style of the Multiple Subject Constructions	17-34
Liching Livy Chiu (National Tsinghua University), Tomohiro Fujii (Nanzan University) and Seichi Sugawa (Nanzan University/Nagoya Gakuin University) On Certain Commonalities between Mandarin Chinese and Japanese Sluicing-like Constructions	35-50
Natalia V. Fitzgibbons (University of Connecticut) Freestanding Negative Concord Items in Russian	51-63
Chisato Fuji, Tomoko Hashimoto and Keiko Murasugi (Nanzan University) VP-Shell Analysis for the Acquisition of Japanese Potentials	65-102
Tomoko Kawamura (Nanzan University) Adverbial <i>Because</i> -clauses as Focal Elements	103-122
Tomomi Nakatani-Murai (Nanzan University) On the Properties of Infant Vocalization in the Japanese Pre-verbal Stage	123-137
Tsuyoshi Sawada (University of Connecticut) <i>Da</i> -Deletion: Classification of Clause-final Elements in Japanese	139-163
Seichi Sugawa (Nanzan University) Ellipsis and Repair Effects	165-183
Shigeki Taguchi (University of Connecticut) Against the Null Complementizer Analysis of Japanese Relative Clauses	185-198
Takuro Tanaka (University of Connecticut) Aspectual Restriction for Floating Quantifiers	199-228
Yasuki Ueda (Nanzan University) and Tomoko Haraguchi (Nagoya Gakuin University) Plurality in Japanese and Chinese	229-242
Eriko Watanabe (Nanzan University) The Overgeneration of Dative Subjects in Child Japanese	243-261
Eriko Watanabe, Chisato Fuji, Yoshie Kabuto and Keiko Murasugi (Nanzan University) Experimental Evidence for The Parameter Resetting Hypothesis: The Second Language Acquisition of English Reflexive-Binding by Japanese Speakers	263-283

#### Special Issue 4

本論文集も、2008年3月に出版された。2007年度の日本語教育領域の研究成果をまとめたものであり、2007年8月1日の同徳女子-南山共同ワークショップおよび2008年2月3日のベルリン自由-同徳女子-ニューサウスウェールズ-南山共同ワークショップで発表された研究論文の一部が掲載されている。

本学からは5名の大学院生が投稿した。古田一恵氏は、学習者同士の添削活動の有効性を

調査し、川崎直子氏は、教室内でのフィードバックの効果について観察している。徐毓瑩氏と了戒直江氏は、共に第二言語習得の段階で観察される間違いに注目している。徐氏は日本語受け身文の習得状況を調査して言い間違いが現れる環境を特定し、了戒氏は名詞修飾の第二言語習得過程に見られる「の」の過剰使用について母語獲得との比較研究を発表した。齊藤一夫氏は、日本語終助詞の教え方の問題点を指摘し、新たな提言を行っている。

同徳女子大学からは、金璇姫氏と水口里香氏が投稿した。金氏は、日本語の種々の否定丁寧表現に注目し、初級学習者の否定丁寧形に対する認識を調査している。水口氏は、韓国の日本語学習者が使用している日本語辞書が、学習者の意味理解の促進にどのように貢献しているかを検討している。ベルリン自由大学からも2編の論文が投稿された。Berthold Frommann氏と三輪聖氏によるものである。Frommann氏は、日本語第二言語話者にとってあいつちの適切な使用が簡単でないことを指摘し、これまで日本語教育で本格的に取り上げられてこなかったあいつちの指導法を提案している。三輪氏は、ドイツで生活する日本人子女の継承語としての日本語をとりまく現状についての報告を行い、実際の接触場面のデータを提示することで、継承日本語の特徴を詳細に検討した。

NANZAN LINGUISTICS, SPECIAL ISSUE 4. 目次 Papers from the Consortium Workshops on Japanese Pedagogy	
序文	v
Berthold Frommann (ベルリン自由大学) あいつちに関する諸考察 —あいつち能力の測定・評価・習得、発生率の解釈—	1-9
古田 一恵(南山大学) ピア・レスポンスに関する一考察	11-31
徐 毓瑩(南山大学) 中間言語に見られる有生物主語受身ラレル形の使用—台湾人日本語学習者の横断的研究—	33-50
川崎 直子(南山大学) 第二言語習得におけるフィードバックの役割に関する考察—新しいフィードバックとピア・インタラクションを通して—	51-86
金 璇姫(同徳女子大学) 初級教材において否定丁寧形「～ません」と「～ないです」の使用—大学の初級教材と映像メディア資料分析を中心に—	87-99
水口 里香(同徳女子大学) 日韓辞書分析の試み—ユーザーフレンドリーの観点から—	101-114
三輪聖(ベルリン自由大学) ドイツにおける継承日本語教育の現状と展望—接触場面研究的アプローチからの貢献—	115-129
了戒 直江(南山大学) 連体修飾構造習得過程における「の」の過剰使用に関する研究	131-141
齊藤 一夫(南山大学) 初級日本語教科書における終助詞「ね／よ」の提出・説明・翻訳が示唆する中国人学習者の習得上の問題	143-167

### 3.2.2. 国際学会での発表

本事業の2年目となる2007年度は、本学大学院生の国際学会における研究発表が、プロジェクトの一つの重要な柱となった。国際共同研究に参加して分野の発展に寄与するためには、一研究者としても独創的な研究を遂行し、不断に国際舞台でその成果を公表していなければ

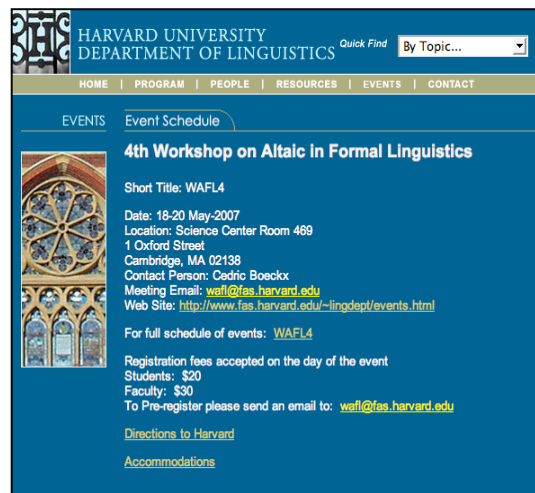
ならない。そこで、本事業では、大学院生がコンソーシアム活動を通して得た研究成果を積極的に国際学会で発表することを奨励し、支援することとした。結果として、年度を通して、大学院生 8 名、大学院研修生 1 名、若手研究者（嘱託講師）1 名が、国際学会において計 13 件の発表を行ったことは大きな成果であったと言えよう。（内 2 件は、2008 年 3 月後半に発表が行われる予定。）この中には、論文採択率が 10% 余の世界有数の学会での発表も含まれる。以下に、その概要を報告する。

## WAFL4

Workshop on Altaic in Formal Linguistics（アルタイ語形式言語学ワークショップ；WAFL）はトルコ語、日本語、韓国語、モンゴル語などのデータに基づいた理論言語学的研究を発表する場である。第 4 回目の大会は、2007 年 5 月 18 日～20 日の日程で米国ハーバード大学で開催され、招待講演と査読審査を通過した 25 件の研究発表が行われた。理論言語学が盛んな大学が集まるボストンでの開催であったため、特に活発な議論が繰り広げられることとなった。

本学からは大学院生の瀧田健介氏と嘱託講師の藤井友比呂氏が参加した。瀧田健介氏は、コンソーシアム活動の中で行った研究の一部をまとめた "An Argument for the Derivational Reformulation of the Proper Binding Condition" と題する論文を発表した。また、藤井友比呂氏の発表論文題目は、"A 'Non-obligatory Control Complement' Puzzle" であった。（藤井氏の経費はすべて本人が負担した。）

[南山大学からの発表者]



5月18日 14:00-14:30	Kensuke Takita	"An Argument for the Derivational Reformulation of the Proper Binding Condition"
5月20日 10:00-10:30	Tomohiro Fujii	"A 'Non-obligatory Control Complement' Puzzle"

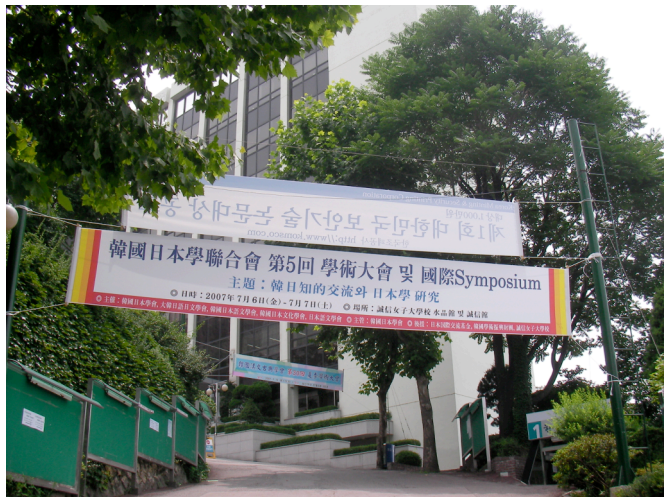
## 韓国日本学連合会 第 5 回学術大会および国際シンポジウム

韓国での日本語研究を先導する 5 学会（韓国日本学会、大韓日語日文学会、韓国日本語文学会、韓国日本文化学会、日本語文学会）が年に一度合同で韓国日本学連合会を開催している。第 5 回目にあたる今回の大会は「韓日知的交流と日本学研究」を主題に 2007 年 7 月 5 日～7 日の日程で韓国・誠信女子大学にて開催された。日本語学 43 人、日本文学 63 人、日本学 34 人、日本語教育 26 人の総計 166 人が研究発表を行い、韓国内外からの研究者が多数参加した。

本学からは大学院生の久我瞳氏、Won Kyong Maria Choe 氏が参加した。久我氏は研究論文「無助詞と日本語教育」を発表し、Choe 氏は「韓国人日本語学習者のあいづち表現の習得についての一考察」を発表した。久我瞳氏の研究は、通常名詞句に後続する格助詞や取立て助詞「ハ」が談話において表出しない現象「無助詞」を、日本語教育の現場に導入するための



指針を探ったものである。現在広く流通している日本語の教科書の一つである『みんなのほんご』を取り上げ、その中で使用可能な無助詞文とそれらの機能の説明を行なった。Won Kyong Maria Choe 氏の発表は日本語を学習している韓国語母語話者の談話データ（KYコーパス）をもとに、各習得レベルごとに見られる日本語のあいづちの使用傾向や特徴を検証したものである。あいづちは母語話者間では多用されているが、学習者は通常それらの特徴を教室内で細かく教わることはないため、あいづちの適切な打ち方を習得するのは困難である。あいづちの指導方法を探るための通過地点として、学習者のあいづち使用の実態を把握すべく、本研究は行なわれた。発表では学習者の日本語熟達レベルの向上に従って、あいづちの打ち方にもバリエーションや積極性が増すという結果を提出した。日本語談話の大きな特徴であるにもかかわらず、これまで取り立てて教室の中では注意を向けられてこなかった「無助詞」や「あいづち」について、日本語以外の言語を母語とする日本語教師も多数参加する海外の学会においてこれらの主旨に基づいた研究発表を行ったことにより、「正しい日本語」だけでなく「自然な日本語」も重要視されるべきであるという久我瞳氏と Won Kyong Maria Choe 氏の主張が、より広く認知され共有されたと言えよう。



[南山大学からの発表者]

7月7日 15:40-16:10	久我瞳	「無助詞と日本語教育」
7月7日 16:20-16:50	Won Kyong Maria Choe	「韓国語日本語学習者のあいづち表現の習得についての一考察」

### Workshop on Early Child Phonology

幼児の言語獲得における音の発現とその音韻的特徴についてのワークショップが、2007年8月16日～17日の日程で香港・中文大学で開催された。中国語、日本語、英語などの言語間の違いや構音障がいの有無による違いなどに注目した対照言語学的な研究会となり、参加者約60名は、基調講演を行ったテキサス大学のBarbara Davis教授を中心に活発な議論を繰り広げた。

本学からは、大学院生・村井（中谷）友美氏と村杉恵子教授の共著論文が発表された。村井氏は、村杉教授の指導の下で2005年に修士論文を執筆し、同年インド・デリーで開催された国際学会Asian GLOW Vにおいて村杉教授とともに研究発表を行ったが、今回の論文はAsian GLOW Vで展開した議論をさらに深め、生後1ヶ月から6ヶ月までの言語獲得



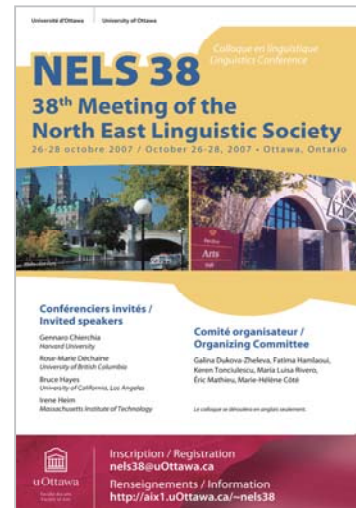
初期に見られる音とジェスチャーの普遍性と遂行的意味の発現について、理論、実証の両面から検討したものである。なお、この発表は、個人としてワークショップに参加した村杉教授が行ったため、本事業からの経費は発生しなかった。

[南山大学からの発表者]

8月17日	Keiko Murasugi Tomomi Nakatani-Murai	"Very Early Language Acquisition: A View from Japanese"
-------	---	---

## NELS 38

North East Linguistics Society (北東部言語学会；略称 NELS) は北米東部最大の理論言語学会で、アメリカ、カナダのみならず、ヨーロッパ、アジアの理論言語学者が集まり、論文採択率は10%余と言われている。第38回目にあたる2007年の大会は、10月26日から28日の日程でカナダ・オタワ大学において開催された。4つの招待研究発表を含む56の口頭発表と29のポスター発表が行われ、言語理論の発展において指導的な役割を担っている言語学者も多数発表者に名を連ねた。会場には、北米の大学に所属する若手研究者も多数集まり、お互いの研究の情報を交換し合う場ともなった。



本学からは、大学院生の瀧田健介氏が本事業で行った研究 "The Proper Binding Condition Effect as a Consequence of Cyclic Linearization" が口頭発表に採択された。極小主義理論において長年問題とされてきた日本語スクランプリングの適性束縛効果を、線形化の理論から説明する意欲的な論文であり、参加者から高い評価を受けた。また、協定校の若手研究者とも再会し、有意義な意見交換の時間をもつことができた。

[南山大学からの発表者]

10月27日 11:00-11:30	Kensuke Takita	"The Proper Binding Condition Effect as a Consequence of Cyclic Linearization"
-----------------------	----------------	--

## BUCLD 32

Boston University Conference on Language Development (ボストン大学言語発達学会；略称 BUCLD) は、言語獲得・言語発達研究において中心的な役割を担う学会である。当該分野の研究者が世界から集うことから、言語獲得、第二言語習得研究の発展に大きな影響力をもち、論文採択率も極めて低い。第32回目にあたる2007年の大会は、11月2日～4日の日程で行われた。大会に先立ち、11月1日には言語獲得のシンポジウムも行われ、活発な議論が繰り広げられた。



本学からは、大学院生・富士千里氏、研修生・橋本知子氏、村杉恵子教授の共著論文 "A Theoretical Account for the Undergeneration and Overgeneration in Japanese Complex Predicates" がポスター発表に採択された。日本語を母語とする幼児にみられる動詞の自他交



替データを詳細に検討し、文構造獲得の過程を検討した論文である。日本語独特の現象を基礎として、言語獲得の普遍的なプロセスに関する提言をしていることが高く評価され、有意義な議論をすることができた。

富士氏は協定校コネチカット大学の William Snyder 教授や大学院生 (Jean Crawford 氏、Jeff Bernath 氏、Elena Koulidobrova 氏)、清華大学の Barry C.-Y. Yang 氏と意見交換を行い、また、本学村杉恵子教授が個人として学会に参加していたこともあり、マサチューセッツ大学 Thomas Roeper 教授、ハワイ大学 Bonnie Schwartz 教授、カンザス大学 Alison Gabrielle 教授、ハーバード大学 James C.-T. Huang 教授などとも、今後の研究について議論する機会を得た。なお、富士氏は、学会から Paula Menyuk Travel Award を受賞し、本事業からは補助されない経費（学会参加費、市内交通費等）がボストン大学から支給された。

[南山大学からの発表者]

11月3日 15:45-16:30, 19:00-19:45	Chisato Fuji Tomoko Hashimoto Keiko Murasugi	"A Theoretical Account for the Undergeneration and Overgeneration in Japanese Complex Predicates"
--------------------------------------	--	---

### Workshop on the Acquisition of Functional Categories in Asian Languages

2007年12月26日に香港中文大学で Asian GLOW VI に先立って行われた本ワークショップでは、言語間の差異において機能範疇が果たす役割に焦点が当てられ、アジア諸言語にみられる機能範疇の特徴とその獲得について多くの研究が発表された。アジアと欧米の言語獲得研究の交流の場ともなり、意義のある意見交換がなされた。

本学からは、大学院生の富士千里氏が、村杉恵子教授との共著論文 "The Acquisition of Aspects in Japanese and its Implications for Acquisition Theory" を発表した。この研究は、ワークショップの最後に行われた Ken Wexler 教授 (MIT) の総括ディスカッションでも、Optional Infinitives の普遍性に関する重要な研究として取り上げられ、文字通りヨーロッパ系言語と日本語を比較する獲得研究に貢献するものであった。



[南山大学からの発表者]

12月26日 11:00-11:30	Chisato Fuji Keiko Murasugi	"The Acquisition of Aspects in Japanese and its Implications for Acquisition Theory"
-----------------------	--------------------------------	--

### GLOW in Asia VI

ヨーロッパにおける生成文法理論の発展の中核を担ってきた国際学会に、Generative Linguistics in the Old World (旧世界生成言語学会；略称 GLOW) があるが、1999年に本学を本部として、その兄弟組織 GLOW in Asia が設立された。以後、Asian GLOW は、アジアにおける理論言語学の発展に大きな影響を与え、本学、台湾、韓国、インドにおける大会開催を経て、北米の NELS、ヨーロッパの GLOW と並ぶ国際学会に成長した。2007年には、

第6回大会が12月27日～29日の日程で香港中文大学で開催された。また前後して、12月26日には上記の言語獲得ワークショップがあり、12月30日には第4回東アジア理論言語学ワークショップ (International Workshop on Theoretical East Asian Linguistics ; 略称 TEAL) が香港理工大学で開催された。

本学からは、採択率 12%という厳しい審査をくぐり抜けて、大学院生 3 名、研修生 1 名、若手研究者 (嘱託講師) 1 名による計 5 編の論文が採択された。(内 2 編は補欠。) 大学院生の瀧田健介氏は、本事業の成果である協定校国立清華大学の大学院生 Barry C.-Y. Yang 氏との共著論文 "Feature Valuation and Antisuperiority" を発表した。素性照合の理論を発展させることによって、*wh* 構文にみられる日中語の相違を説明する内容で

あり、1980 年代に *wh* 構文比較研究の基礎を築いたハーバード大学の C.-T. James Huang 教授からも高い評価を得た。また、本学村杉恵子教授、研修生・橋本知子氏、ならびに大学院生・富士千里氏は共著論文 "What Acquired Later in an Agglutinative Language: Implications for the *v*-VP Frame Analysis" を発表した。この論文は、村杉教授の提案した日本語獲得の初期における文法特性 (Root Infinitives と機能範疇の主要部が音形を持たない中間段階) を支持する証拠を、日本語を母語とする複数の幼児の記述的データに基づき提示するものであり、機能範疇に関わる有標性についてのパラメータを論ずるものである。詳細な日本語研究に基づく一般的、理論的研究として高い評価を得た。渡邊恵理子氏の研究 "Dative Subject in Japanese-speaking Children" と瀧田健介氏の研究 "A Linearization Approach to the PBC-effect and its Consequences" は補欠論文として選ばれた。

学会には、瀧田氏、富士氏、渡邊氏に加えて、斎藤衛教授、村杉恵子教授、藤井友比呂嘱託講師が個人として参加した。香港中文大学、香港理工大学、天津外国語大学を中心とする香港、中国の研究者と交流することができ、今後の協力について話し合いが行われた。また、協定校の国立清華大学、EFL 大学、ケンブリッジ大学、コネチカット大学からも多数の参加があり、共同研究を進める機会ともなった。懇親会等で、コンソーシアムがたびたび話題に登り、アジアにおける本事業の反響が大きいことも実感された。なお、瀧田氏は学会の奨学金を得て、航空運賃の一部を支給された。





## [南山大学からの発表者]

12月27日 11:15-12:00	Takuya Goro Tomohiro Fujii Utako Minai Masatoshi Koizumi	"The Acquisition of Anti-Reconstruction and Grammar Variation in Adult Japanese"
12月27日 14:15-15:00	Keiko Murasugi Chisato Fuji Tomoko Hashimoto	"What Acquired Later in an Agglutinative Language: Implications for the v-VP Frame Analysis"
12月29日 17:00-17:45	Kensuke Takita Barry C.-Y. Yang	"Feature Valuation and Antisuperiority"
12月29日 17:45-18:30	Mamoru Saito (invited)	"Argument Ellipsis and (the Absence of) Agreement"
Alternate	Kensuke Takita	"A Linearization Approach to the PBC-effect and its Consequences"
Alternate	Eriko Watanabe	"Dative Subject in Japanese-speaking Children"

**The 9th Tokyo Conference on Psycholinguistics (TCP 2008)**

東京心理言語学会議 (Tokyo Conference on Psycholinguistics) は、2000年以降、慶応義塾大学で毎年開催されており、国内外の言語学者が集まる日本における数少ない理論言語学の国際学会の一つとして、その名を知られている。第9回の大会は、2008年3月14日～15日の日程で行われる予定である。本学からは、大学院生の瀧田健介氏の論文 "String-Vacuous Scrambling and Cyclic Linearization" が口頭発表に採択された。日本語スクランブリングにみられる様々な制約が、NELS (2007年10月26日～28日) での発表において提案した線形化メカニズムの帰結として説明できることを示す論文であり、博士論文に向けて着実に研究の積み上げがなされていることを窺わせる内容である。

## [南山大学からの発表者]

3月14日 15:20-15:50	Kensuke Takita	"String-Vacuous Scrambling and Cyclic Linearization"
----------------------	----------------	--

## 第14回ドイツ語圏日本語教育研究会シンポジウム

ドイツ語圏日本語教育研究会シンポジウムは、ドイツ語圏における日本語教授法の研究の場として、発足以来重要な役割を担っている。高等教育機関で日本語教育に携わる教師の資質の向上と合理的な日本語教育の実践を目標にし、1994年以來毎年シンポジウムが開かれている。2008年には第14回シンポジウムがエアランゲン大学で開催され、日本留学をテーマに日本語教師による研究と実践の報告、招聘講師による講義が行われる予定である。



本学からは、大学院生の川崎直子氏と徐毓瑩氏が山田ボヒネック頼子ベルリン自由大学教授と共同で行った研究「接触場面研究と教材化：学際的アプローチの理論と実践—ベルリンと名古屋におけるケーススタディーをもとに—」が口頭発表に採択された。この研究は、本事業の一環として2006年2月に行われた山田ボヒネック教授のコンソーシアム講義から発展した共同研究である。

[南山大学からの発表者]

3月29日 10:00-10:50	山田ボヒネック頼子 川崎直子 徐毓瑩	「接触場面研究と教材化：学際的アプローチの理論と実践—ベルリンと名古屋におけるケーススタディーをもとに—」
----------------------	--------------------------	---

## ＊ 大学院生の受賞・学会からの奨学金

大学院生の中には本事業で行った研究を国際学会で発表し、学会から賞を受けたものがあった。ここではそれらの学会賞受賞を報告する。

### Paula Menyuk Travel Award (富士千里氏)

Paula Menyuk Travel Award は、ボストン大学 Paula Menyuk 名誉教授によって、BUCLD への学生の参加を補助する目的で設立された。現在は米国科学財団 (National Science Foundation) による助成金、米国国立衛生研究所 (National Institute of Health) からの助成金、民間からの寄付によって運営されている。2007年の第32回大会では、学生に対する補助の上限を一人400アメリカドル (約44,130円) として、受賞者の選考が行われた。

本学からは、大学院生の富士千里氏が、研修生・橋本知子氏、村杉恵子教授との共著論文 "A Theoretical Account for the Undergeneration and Overgeneration in Japanese Complex Predicates" を発表して、本賞を受賞した。学会の意向により、富士氏に与えられた補助金は、本事業から補助のない学会参加費、ボストン市内での移動費などに当てられた。



GLOW in Asia VI Student Travel Grant (瀧田健介氏)

国際学会 GLOW in Asia に参加する大学院生を支援する目的で、主催大学である香港中文大学が少数の学生に対して助成金を用意した。本学からは、大学院生の瀧田健介氏が協定校・国立清華大学の Barry C.-Y. Yang 氏との共著論文 "Feature Valuation and Antisuperiority" を発表し、3000 香港ドル（約 42,500 円）を受賞した。本助成金は航空運賃の支払いを補助するものであったため、航空運賃 100,400 円のうち、3000 香港ドルに相当する 42,500 円を本賞の助成金から、残りの 57,900 円を本事業予算から支出した。



Workshop on Early Child Phonology、Workshop on the Acquisition of Functional Categories in Asian Languages および GLOW in Asia VI が行われた香港中文大学

### 3.3. 本事業に関わる公刊論文・口頭発表一覧

前節でその一部を紹介した本学大学院生と若手研究者による公刊論文と口頭発表を以下に列挙する。論文については、大学院生 19 名、研修生 1 名、科目等履修生 1 名、嘱託講師 2 名によって、計 37 編が発表されている。国際的専門誌での論文掲載は 1 件、学会論文集での論文掲載は 7 件と未だに少ないが、前述したように、専門誌に投稿中あるいは投稿準備中の論文、学会論文集に掲載が予定されている準備中の論文が多くあり、その数は 1 年以内に大きく増加するものと思われる。また、協定校研究者との共著論文は 2 編、共同発表は 2 件と、これもまだ少ないが、共同研究は着実になされており、近い将来にその成果が発表されることになろう。本学大学院生の過去 2 年間の研究は、コンソーシアム活動を中心になされてきたことから、単著論文であっても、その成果を反映していることに留意されたい。(共著論文著者名に記された下線は本学大学院生・若手研究者を示す。)

#### 3.3.1. 南山大学院生・若手研究者の公刊論文

- Aono, Masumi. 2007. Derivational Theta-marking and a Uniform Analysis of the Progressive/Perfective *-te iru*. *Nanzan Linguistics, Special Issue 1, Volume 1*, pp. 1-21.
- 坂大京子 2007. 教師の訂正フィードバックと学習者のアップテイク. *南山言語科学 2*, pp. 21-40.
- Choe, Won Kyong Maria. 2007. 韓国人日本語学習者のあいづち表現の習得についての一考察. 韓国日本学聯合會 第 5 回 學術大會 및 韓國日本語文學會第 25 回學術大會, pp. 946-951.
- Fuji, Chisato. 2007. Two Types of Causatives in Japanese and JSL: A Study in Syntax and Acquisition. *Nanzan Linguistics, Special Issue 1, Volume 1*, pp. 33-65.
- Fuji, Chisato, Tomoko Hashimoto, and Keiko Murasugi. To appear. A Theoretical Account for the Undergeneration and Overgeneration in Japanese Complex Predicates. In *Online Proceedings Supplement of BUCLD 32* (<http://www.bu.edu/linguistics/APPLIED/BUCLD/proc.html>).
- Fuji, Chisato, Tomoko Hashimoto, and Keiko Murasugi. 2008. VP-Shell Analysis for the Acquisition of Japanese Potentials, *Nanzan Linguistics, Special Issue 3, Volume 2*, pp. 65-102.
- Fujii, Tomohiro. 2007. Controlling Japanese Experiencer. *Nanzan Linguistics, Special Issue 1, Volume 2*, pp. 1-17.
- Fujii, Tomohiro, and Kensuke Takita. 2007. *Wh*-adverbials In-situ, their Island-(in)sensitivity and the Role of Demonstratives in *Wh*-in-situ Licensing. *Nanzan Linguistics, Special Issue 3, Volume 1*, pp. 107-126.
- Fujii, Tomohiro. In press. A 'Non-obligatory Control Complement' Puzzle. *The Proceedings of WAFL 4, MIT Working Papers in Linguistics*.
- 徐毓瑩 2007. 日本語の視点表現の習得について. *Nanzan Linguistics, Special Issue 2*, pp. 1-11.
- Ito, Atsushi. 2007. Argument Structure of Japanese Ditransitives. *Nanzan Linguistics, Special Issue 3, Volume 1*, pp. 127-150.
- 加太良枝 2007. 疑問副詞の LF 移動と非選択的束縛の獲得 一実証的研究から一. *南山言語科学 2*, pp. 61-80.



- Kabuto, Yoshie. 2007. The Acquisition of the Mechanism of Unselective Binding, LF *Wh*-movement and Constraints on Movement. *Nanzan Linguistics, Special Issue 3, Volume 1*, pp. 151-163.
- 川崎直子 2007. 第二言語習得における否定的フィードバックに関わる一考察. *Nanzan Linguistics, Special Issue 2*, pp. 59-79.
- Tomoko Kawamura. 2008. Adverbial *Because*-clause as Focal Elements. *Nanzan Linguistics, Special Issue 3, Volume 2*, pp. 103-122.
- 久我瞳 2007. 無助詞と日本語教育. 韓国日本学聯合會第5回學術大會 및 韓国日本語文學會第25回學術大會, pp. 896-900.
- 水島展子 2007. 日本語の複数標識「たち」の意味解釈と構造. *南山言語科学 2*, pp. 121-138.
- 村杉恵子, 富士千里 2007. 愛媛方言から言語（獲得）理論へ. *アカデミア文学・語学編 82*, 南山大学, pp. 43-94.
- Murasugi, Keiko, Tomoko Hashimoto, and Chisato Fuji. 2007. VP-shell Analysis for the Acquisition of Japanese Intransitive Verbs, Transitive Verbs, and Causatives. *Linguistics 45 (3)*, pp. 615-651.
- Nakatani-Murai, Tomomi. 2008. On the Properties of Infant Vocalization in the Japanese Pre-verbal Stage. *Nanzan Linguistics, Special Issue 3, Volume 2*, pp. 123-137.
- 新村正人 2007. コピュラの統語的特徴と普遍性. *南山言語科学 2*, pp. 161-178.
- Niimura, Masato. 2007. A Syntactic Analysis of Copula Sentences. *Nanzan Linguistics, Special Issue 3, Volume 1*, pp. 203-237.
- 齊藤一夫 2007. 談話標識「そうですね」のコミュニケーション機能について. *Nanzan Linguistics, Special Issue 2*, pp. 121-144.
- Sugawa, Seichi. 2008. Ellipsis and Repair Effects. *Nanzan Linguistics, Special Issue 3, Volume 2*, pp. 165-183.
- 瀧田健介 2006. NP 内での敬語化と NP 削除. 133 回大会（2006 年度秋季大会）日本言語学会予稿集, pp. 141-146.
- Takita, Kensuke. 2007. NP-internal Honorification and N'-Deletion in Japanese. *Nanzan Linguistics, Special Issue 1, Volume 2*, pp. 45-67.
- Takita, Kensuke. 2007. Focus and *Wh* Features in Interrogative C. *Nanzan Linguistics, Special Issue 1, Volume 1*, pp. 129-163.
- Takita, Kensuke. In press. An Argument for the Derivational Reformulation of the Proper Binding Condition. *The Proceedings of WAFL 4, MIT Working Papers in Linguistics, Cambridge, MA*.
- Takita, Kensuke. In press. The Proper Binding Condition Effect as a Consequence of Cyclic Linearization. *The Proceedings of NELS, GSLA, University of Massachusetts, Amherst*.
- Takita, Kensuke, Chisato Fuji, Yoshie Kabuto, Eriko Watanabe, and Tomohiro Fujii. 2007. Category-based Unselective Binding: Evidence from Japanese. *Nanzan Linguistics, Special Issue 1, Volume 2*, pp. 91-98.
- Takita, Kensuke, Chisato Fuji and Barry C.-Y. Yang. 2007. *Wh*-questions in Chinese and Japanese I: Anti-crossing and Anti-superiority. *Nanzan Linguistics, Special Issue 1, Volume 2*, pp. 99-112.

- Ueda, Yasuki, and Tomoko Haraguchi. 2007. Plurality in Japanese and Chinese. *Nanzan Linguistics*, Special Issue 3, Volume 2, pp. 229-242.
- Watanabe Eriko. 2008. The Overgeneration of Dative Subjects in Child Japanese. *Nanzan Linguistics*, Special Issue 3, Volume 2, pp. 243-261.
- Watanabe, Eriko, Chisato Fuji, Yoshie Kabuto and Keiko Murasugi. 2008. Experimental Evidence for the Parameter Resetting Hypothesis: The Second Language Acquisition of English Reflexive-Binding by Japanese Speakers. *Nanzan Linguistics*, Special Issue 3, Volume 2, pp. 263-283.
- 山崎紀子 1997. 接触場面の教材化 —ポーランドで望まれる接触場面教材とは—. *南山言語科学* 2, pp. 241-260.
- Yano, Keiko. 2007. A Study in Syntax, Learnability, and Acquisition. *南山言語科学* 2, pp. 261-277.
- Yano, Keiko. 2007. The Structure of the Japanese Potential (*r*)*eru* Construction: A Study in Syntax, Learnability, and Acquisition. *Nanzan Linguistics*, Special Issue 3, Volume 1, pp. 331-351.

### 3.3.2. 南山大学院生・若手研究員の学会/ワークショップでの口頭発表

- Aono, Masumi. 2006. *Wh*-phrases, Negative Polarity Items, and Anti-Superiority Effects in Japanese. Hyderabad-Nanzan Joint Workshop on the Syntax-Semantics Interface, held at Nanzan University, October 2006.
- 坂大京子 2006. 学習者のアップテイクを引き出す教師の訂正フィードバックの特徴 —日本語中級クラスにおいて—. *日本語教育学会秋季大会*, 熊本県立大学, 2006年10月.
- 坂大京子 2007. 教師の訂正フィードバックと学習者のアップテイク —初級クラスと中級クラスにおいて—. *ベルリン自由-南山共同ワークショップ*, 2007年1月.
- 坂大京子 2007. 成功アップテイクを導く訂正フィードバックの特徴 —初級クラスと中級クラスの比較から—. *第二言語習得研究会(JASLA)全国大会*, 早稲田大学, 2006年12月.
- Choe, Won Kyong Maria. 2007. 韓国人日本語学習者のあいづち表現の習得についての一考察. 第五回韓国日本学連合会, 韓国誠信女子大学, 2007年7月.
- Fuji, Chisato, Tomoko Hashimoto, and Keiko Murasugi. 2007. Intermediate Stages in the Acquisition of the Japanese Potential Construction. Connecticut-Nanzan Joint Workshop on Minimalist Syntax, held at Nanzan University, June 2007.
- Fuji, Chisato, Tomoko Hashimoto, and Keiko Murasugi. 2007. A Theoretical Account for the Undergeneration and Overgeneration in Japanese Complex Predicates. Boston University Conference on Language Development (BUCLD), held at Boston University, November 2007.
- Fuji, Chisato, and Keiko Murasugi. 2007. Aspect in Early Child Japanese: Evidence for Null Functional Head Hypothesis. International Symposium of the Cambridge-Connecticut-Hyderabad-Nanzan-Siena-Tsinghua Consortium for Linguistics, held at National Tsinghua University, Taiwan, December 2007.
- Fuji, Chisato, and Keiko Murasugi. 2007. The Acquisition of Aspects in Japanese and its Implications for Acquisition Theory. Workshop on the Acquisition of Functional Categories in Asian Languages, held at the Chinese University of Hong Kong.

- Fujii, Tomohiro. 2006. Controlling Japanese Experiencer. Hyderabad-Nanzan Joint Workshop on the Syntax-Semantics Interface, held at Nanzan University, October 2006.
- Fujii, Tomohiro. 2007. A 'Non-obligatory Control Complement' Puzzle. The First Cambridge-Nanzan Syntax Workshop, held at the University of Cambridge, May 2007.
- Fujii, Tomohiro. 2007. A 'Non-obligatory Control Complement' Puzzle. 4th Workshop on Atlantic in Formal Linguistics (WAFL), held at Harvard University, May 2007.
- Fujii, Tomohiro. 2007. Multiple Subjects/Objects, External Inalienable Possession, and the Role of Doubling. The Fourth Tsinghua-Nanzan Joint Workshop, held at Nanzan University, July 2007.
- Fujii, Tomohiro. 2007. The Role of Higher Functional Heads in the Person Restriction in Japanese. International Symposium of the Cambridge-Connecticut-Hyderabad-Nanzan-Siena-Tsinghua Consortium for Linguistics, held at National Tsinghua University, Taiwan, December 2007.
- Fujii, Tomohiro, and Kensuke Takita. 2007. *Wh*-adverbials, their Island-(in)sensitivity and the Role of Demonstratives in *Wh*-in-situ Licensing. Connecticut-Siena-Nanzan Joint Workshop on Linguistic Theory and Language Acquisition, held at Nanzan University, February 2007.
- 古田一恵 2006. 作文指導におけるピア・レスポンスによる指導. 第二言語習得研究会(JASLA)全国大会, 早稲田大学, 2006年12月.
- 古田一恵 2007. ピア・レスポンス活動中のピア・フィードバック. 日本語教育学会第3回研究集会, 岐阜大学 2007年6月.
- 古田一恵 2007. ピア・レスポンスについての考察 —ピア・フィードバックとビリーフに注目して—. 同徳女子-南山共同ワークショップ, 2007年8月.
- 徐毓瑩 2006. 日本語の視点表現の習得について. 同徳女子-ニューサウスウェールズ-南山共同ワークショップ, 2006年10月.
- 徐毓瑩 2007. 日本語視点表現の習得について. ベルリン自由-南山共同ワークショップ, 2007年1月.
- 徐毓瑩 2007. 日本語受身表現の習得 —台湾人日本語学習者の場合. 同徳女子-南山共同ワークショップ, 2007年8月.
- 徐毓瑩 2008. 中間言語に見られる受身ラレル形の使用 —台湾人日本語学習者の横断的研究—. ベルリン自由大学-ニューサウスウェールズ大学-同徳女子大学校-南山大学共同ワークショップ, 2008年2月.
- Ito, Atsushi. 2006. On High and Low Goals in Japanese Ditransitives. Cambridge-Nanzan-Tsinghua Workshop on Word Order and Functional Categories, held at Nanzan University, December 2006.
- Ito, Atsushi. 2007. Honorification in Japanese and Lexical Decomposition. Workshop on Romance-Japanese: Comparative Syntax and Language Acquisition, held at the University of Siena, May 2007.
- Ito, Atsushi. 2008. Movement into Theta Positions and Numeral Quantifier Stranding. The Nanzan-Cambridge-EFL Joint Seminar on Parametric Syntax and Acquisition, held at EFL University, Hyderabad, January 2008.

- Ito, Atsushi. 2008. Movement into Theta Positions and Numeral Quantifier Stranding. Siena-Tsinghua-Nanzan Joint Workshop on Syntactic Theory and Language Acquisition, held at Nanzan University, February 2008.
- Kabuto, Yoshie. 2007. The Acquisition of *Naze* 'why' and *Dooyuu riyuu-de* 'for what reason' in Japanese. Connecticut-Siena-Nanzan Joint Workshop on Linguistic Theory and Language Acquisition, held at Nanzan University, February 2007.
- Kawamura, Tomoko. 2007. Adverbial *Because*-clauses as Focal Elements. Cambridge-Hyderabad-Nanzan Joint Workshop on Interface Conditions, held at Nanzan University, September 2007.
- 川崎直子 2006. 第二言語習得における否定的フィードバックに関わる一考察. 同徳女子-ニューサウスウェールズ-南山共同ワークショップ, 2006年10月.
- 川崎直子 2007. 第二言語習得における否定的フィードバックの一考察. ベルリン自由-南山共同ワークショップ, 2007年1月.
- 川崎直子 2007. フィードバックに対する教師と学習者の乖離現象. 同徳女子-南山共同ワークショップ, 2007年8月.
- 川崎直子・徐毓瑩・久我瞳 2007. 「接触場面研究の教材化 —三ヶ国の学習者を対象にした教材作成—. 第6回国際OPIシンポジウム, 大学コンソーシアム京都, 2007年8月.
- 川崎直子 2008. 第二言語習得におけるフィードバックの役割について —ピア・インタラクションを通して—. ベルリン自由大学-ニューサウスウェールズ大学-同徳女子大学校-南山大学 共同ワークショップ, 2008年2月.
- 川崎直子, 徐毓瑩, 山田ボヒネック頼子. 2008. 接触場面研究と教材化: 学際的アプローチの理論と実践 —ベルリンと名古屋におけるケーススタディーをもとに—. 第14回ドイツ語圏日本語教育シンポジウム, ドイツ・エアランゲン大学 (Friedrich-Alexander-Universität Erlangen-Nürnberg), 2008年3月 (予定) .
- 久我瞳 2007. 「刃物研ぎます」はなぜ「刃物を研ぎます」にはならないのか —無助詞現象に関わる一考察. 日本語教育学会第3回研究集会, 岐阜大学, 2007年6月.
- 久我瞳 2007. 無助詞と日本語教育. 韓国日本学連合会 第五回, 韓国誠信女子大学, 2007年7月.
- 松本恭子 2007. ある中国人児童来日2年9ヶ月間の誤用の変化と「発達上の誤用」の可能性 —中国人児童の誤用と日本人幼児の誤用の比較を通して—. 日本語教育学会第3回研究集会, 岐阜大学, 2007年6月.
- Murasugi, Keiko, Chisato Fuji, and Tomoko Hashimoto. 2007. What Acquired Later in an Agglutinative Language: Implications for the *v*-VP Frame Analysis. Generative Linguistics in the Old World (GLOW) in Asia, held at the Chinese University of Hong Kong, December 2007.
- Murasugi, Keiko, and Tomomi Nakatani-Murai. 2007. Very Early Language Acquisition: A View from Japanese. Workshop on Early Child Phonology, held at the Chinese University of Hong Kong, August 2007.
- Nakatani-Murai, Tomomi. 2008. On the Properties of Infant Vocalization in the Japanese Preverbal Stage. Siena-Tsinghua-Nanzan Joint Workshop on Syntactic Theory and Language Acquisition, held at Nanzan University, February 2008.
- Niimura, Masato. 2007. A Syntactic Analysis of Copula Sentences. Connecticut-Siena-Nanzan Joint Workshop on Linguistic Theory and Language Acquisition, held at Nanzan University, February 2007.

- 了戒直江 2007. 成人 JSL 学習者の日本語習得と日本語教育. 同徳女子-南山共同ワークショップ, 2007年8月.
- 了戒直江 2008. 「の」の過剰使用をめぐる諸説. ベルリン自由大学-ニューサウスウェールズ大学-同徳女子大学校-南山大学共同ワークショップ, 2008年2月.
- 齊藤一夫 2006. 談話標識「そうですね」について –そのコミュニケーション機能と日本語教育における指導上の問題点. 同徳女子-ニューサウスウェールズ-南山共同ワークショップ, 2006年10月.
- 齊藤一夫 2007. 談話標識「そうですね」のコミュニケーション機能について. ベルリン自由-南山共同ワークショップ, 2007年1月.
- 齊藤一夫 2007. 初級日本語教科書における終助詞「ね/よ」の提出・説明・翻訳が示唆する中国人学習者の習得上の問題. 同徳女子-南山共同ワークショップ, 2007年8月.
- 齊藤一夫 2008. 初級日本語教科書における終助詞「ね/よ」の提出・説明・翻訳が示唆する中国人学習者の習得上の問題. ベルリン自由大学-ニューサウスウェールズ大学-同徳女子大学校-南山大学共同ワークショップ, 2008年2月.
- Saito, Mamoru, and Kensuke Takita. 2007. Three Ways to Get to the vP Edge. International Symposium of the Cambridge-Connecticut-Hyderabad-Nanzan-Siena-Tsinghua Consortium for Linguistics, held at National Tsinghua University, Taiwan, December 2007.
- Sugawa, Seichi. 2007. Ellipsis and Repair Effects. Cambridge-Hyderabad-Nanzan Joint Workshop on Interface Conditions, held at Nanzan University, September 2007.
- 瀧田健介 2006. NP 内での敬語化と NP 削除. 日本言語学会 133 回大会 (2006 年度秋季大会). 札幌学院大学, 2006 年 11 月.
- Takita, Kensuke. 2006. NP-internal Honorification and N'-deletion. Cambridge-Nanzan-Tsinghua Workshop on Word Order and Functional Categories, held at Nanzan University, December 2006.
- Takita, Kensuke. 2006. Focus and Wh Features in Interrogative C. Tsinghua-Nanzan Joint Workshop on Movement and Interpretation, held at Nanzan University, September 2006.
- Takita, Kensuke. 2007. Chinese is Head-initial. How about Japanese?. Informal Workshop on Formal Syntax, held at National Tsinghua University, Taiwan, March 2007.
- Takita, Kensuke. 2007. An Argument for the Derivational Reformulation of the Proper Binding Condition. 4th Workshop on Atlantic in Formal Linguistics (WAFL), held at Harvard University, May 2007.
- Takita, Kensuke. 2007. Chinese is Head-initial. How about Japanese?. Workshop on Romance-Japanese: Comparative Syntax and Language Acquisition, held at the University of Siena, May 2007.
- Takita, Kensuke. 2007. Order in Narrow Syntax and PF. Connecticut-Nanzan Joint Workshop on Minimalist Syntax, held at Nanzan University, June 2007.
- Takita, Kensuke. 2007. Proper Binding Effect as a Consequence of Cyclic Linearization. The Fourth Tsinghua-Nanzan Joint Workshop, held at Nanzan University, July 2007.
- Takita, Kensuke. 2007. The Proper Binding Condition Effect as a Consequence of Cyclic Linearization. North East Linguistics Society (NELS), held at the University of Ottawa, Canada, October 2007.

- Takita, Kensuke. 2007. A Linearization Approach to the PBC-effect and its Consequences. Generative Linguistics in the Old World (GLOW) in Asia, held at the Chinese University of Hong Kong, December 2007.
- Takita, Kensuke. 2008. A Linearization Approach to the PBC-effect and its Consequences. The Nanzan-Cambridge-EFL Joint Seminar on Parametric Syntax and Acquisition, held at EFL University, Hyderabad, January 2008.
- Takita, Kensuke. 2008. Cyclic Linearization, PBC Effects and Related Issues. Siena-Tsinghua-Nanzan Joint Workshop on Syntactic Theory and Language Acquisition, held at Nanzan University, February 2008.
- Takita, Kensuke. 2008. String-Vacuous Scrambling and Cyclic Linearization. The 9th Annual Tokyo Conference on Psycholinguistics [TCP 2008], Keio University, March 2008(予定).
- Takita, Kensuke and Barry C.-Y. Yang. 2007. Feature Valuation and Antisuperiority. Generative Linguistics in the Old World (GLOW) in Asia, held at Chinese University of Hong Kong, December 2007.
- 豊田奈津 2007. 依頼に対する断り場面の考察. 日本語教育学会第 3 回研究集会, 岐阜大学, 2007 年 6 月.
- Ueda, Yasuki and Tomoko Haraguchi. 2007. Plurality in Japanese and Chinese. International Symposium of the Cambridge-Connecticut-Hyderabad-Nanzan-Siena-Tsinghua Consortium for Linguistics, held at National Tsinghua University, Taiwan, December 2007.
- Ueda, Yasuki and Tomoko Haraguchi. 2008. Plurality and Nominal Constructions in Japanese and Chinese. The Nanzan-Cambridge-EFL Joint Seminar on Parametric Syntax and Acquisition, held at EFL University, Hyderabad, January 2008.
- Watanabe, Eriko. 2007. UG and Second Language Acquisition — The L2 Acquisition of Reflexive Binding. Informal Workshop on Formal Syntax, held at National Tsinghua University, Taiwan, March 2007.
- Watanabe, Eriko. 2007. The Overgeneration of Dative Subjects in Child Japanese. Connecticut-Nanzan Joint Workshop on Minimalist Syntax, held at Nanzan University, June 2007.
- Watanabe, Eriko. 2007. Dative Subject in Japanese-speaking Children. Generative Linguistics in the Old World (GLOW) in Asia (Alternate), held at Chinese University of Hong Kong, December 2007.
- Watanabe, Eriko. 2008. On the Case Errors in Child Japanese. Siena-Tsinghua-Nanzan Joint Workshop on Syntactic Theory and Language Acquisition, held at Nanzan University, February 2008.
- Watanabe, Eriko, Chisato Fujii, Yoshie Kabuto, and Keiko Murasugi. 2007. Parameter Setting in the L2 Acquisition of Reflexive Binding. Connecticut-Siena-Nanzan Joint Workshop on Linguistic Theory and Language Acquisition, held at Nanzan University, February 2007.
- 山崎紀子 2007. 接触場面の教材化 —ポーランドで望まれる接触場面教材とは—. ベルリン自由-南山共同ワークショップ, 2007 年 1 月.
- Yano, Keiko. 2007. The Structure of Japanese Potential (*R*)*eru* Construction: A Study in Syntax, Learnability, and Acquisition. Connecticut-Siena-Nanzan Joint Workshop on Linguistic Theory and Language Acquisition, held at Nanzan University, February 2007.